

## 「世界の教育」

石川県立金沢桜丘高等学校 二年 河合 真衣

三十六パーセント。

これはアフガニスタンの識字率だ。私はこの数字を見たときとても驚いた。三十六パーセントということは約三分の二の人々が、読み書きできないということだ。

アフガニスタンだけでなく、世界で読み書きができない人は七億七千四百万人にもものぼり、その内の成人の六十四パーセントは女性だ。また、学校へ行けない子どもは一億人もいるという現実も見逃せない。

教育を受けたたくとも受けられないことは、ただ読み書きができないという不都合だけではすまない。読み書きや計算という基本的な学力が習得できない結果、社会的に安定した仕事につけるわけもない。学問が受けられず、学力が身につかず、社会的にも十分な生活力が得られないまま、その子どももまた同じような運命をたどることになる。どこかで救済策が施されないと、これらの人々はずっと置き去りにされたままになっていくことになる。

そこでいろいろな機関が発展途上国の教育を支援しているらしい。初等、中等教育の量的拡大や質の向上、教育における男女の差をなくすことなどの策がとられている。また、学校を作るだけでなく、「教育に対する親の無理解」のために学校へ行けない子どもたちもいるため、教育の重要性・必要性に対する人々の理解を進めるための啓蒙活動も推進されている。

「支援しているらしい」と言ったのは、実際にこうして調べるまで、どのような支援が行われているか、私自身が知らなかったからだ。学校へ行けない子どもたちの存在は知っていたが、これはどの数の多さとは考えもしなかった。いずれにしても、自分の生活感覚からはあまり現実味が無く、『関係のない』ことだととらえているのが実際のところだった。

しかし、このような人々の就学の問題が解決されなければ、世界の教育の問題は解決されないわけで、人種や男女や地域などの隔差は埋められない。つまり、私がそうであったように、世界中の人々にこの厳しい隔差の現状を報告し、多くの人が「知る」ことから始めなければならぬのだ。

ところで、日本の教育はどうだろうか。義務教育として基本的な教育が義務化され、高校も全入に近い状況だ。大学への進学率もかなりの数値となっている。しかしその一方で授業中の私語や歩きまわり、「学級崩壊」がおきていたり、いじめによる自殺が増加する問題をかかえている。また日本は、他の国よりも自宅での学習時間が少ない。教育を当たり前に受けられる社会体制の中で勉強できることのありがたみを忘れてしまっているとも言える。世界には勉強したくてもできない人々が大勢いるという現実と、勉強できる自分たちの環境を比較し、「学べる幸せ」をもっと大切に受けとめるべきだ。「ゆとり教育」によって学力が低下したのではないか、という問題が取り上げられることもある。「ゆとり教育」などの方法論の問題で検討することも大切だが、世界に目を開き、一人ひとりの能力が花ひらく方向をいつもさがして行ける考え方が広く行きわたることの方が大切なのではないだろうか。

世界には、教育を受けられないという問題がある。教育を受けられても、そのありがたみを忘れて、学ぼうという意識が薄いというのは論外だ。一人ひとりが自分から学ぶ目的を持ち、確かな情報を手に入れることで、その方向を選び、そのために学ぶ機会は均等に与えられるべきだ。

まず、自分がしっかりとした知識や能力を身につけ、それを世界の教育の普及にどのように生かしていけるか、これから常に考えていきたい。

